魔法遣いのオキテ

yuunagi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法遣いのオキテ

【Ｎコード】
Ｎ２５４９Ｚ

【作者名】
ｙｕｕｎａｇｉ

【あらすじ】
タイムタイムと呼ばれる古の魔具の力のおかげで素養がある者だけが世界を往来する事が出来た。その力で様々な世界軸の住民が交流を深める１４１１軸の世界があった。
そこには世界最大の教育機関、通称「アカデミー」と呼ばれる学園には普通科（普通学科）と魔遣科（魔法遣使学科）の二つ学科コースがある。普通科はその名の通り、通常通りの学生生活を送る。だが、魔遣科は違った。教官となる人物が立ち上げた事務所に各々好きな場所を選び、そこが学び舎と化す。そして、与えられる仕事を

こなさなければ単位を得られない特殊な学科だった……。
とある事務所に通う魔遣科の雨宮彗月が１８１４軸と呼ばれる世界で起こった事件に仲間と共に挑む事になったのだが……。

序　章～夢見る愚者～　前篇

幾億もの星々が瞬く夜空。
重なり合って浮かぶ青と赤の光彩を放つ双月が一際目立つ満月の夜。
地上数百メートルにも及ぶ高さがある電波塔の外郭の縁に立ち、光賑わう下界の様子を眉間にしわを寄せ目を凝らしながら眺める少年が一人……。
強風にさらされながらも少年は夜空を見上げ口元を緩ませ、両手を広げる。
そして、そのまま下界の光に吸い込まれるかのように足を進めて唯一の足場であった鉄骨から身体が離れた。
しかし、少年は地に落ちる事無く悠然と宙を歩く。
そこに踏み場があるかのように軽やかに駆け回る。
少年は夢中で駆け回り息が上がったのかその場に倒れ伏せ、仰向けになった状態で夜空に手をかざした。夜空に煌めく星々を掴み取ろうと何回も何回も試みるが掴み取る事が出来なかった。それどころか星々が瞬く夜空から無情にも少年の身体が遠退いていく……。
その遠退いていく夜空を見つめながら落下する少年の身体は赤く燃え上がり風を切るほどの速度まで加速し、ものの数秒で地上に到達しようとしていた……。
その下では幹線道路が渋滞し車がひしめき合う中、鳴らされるクラクションの音や人々が騒ぎ立てる歓楽街があった。チカチカ光る看板がまぶしく怪しげな雰囲気を漂わせる歓楽街に突如、不似合いな轟音が鳴り響き、辺りの音が一斉に止む。
音が止んで数秒ほど経過してから今度は若い女性の悲鳴が歓楽街に響き渡り、辺りは騒然となった。
若い女性が身体を震わせ膝をついたその地面にはおびただしい量の赤い液体が海のように広がり辺りを赤く染め上げ、火の粉が舞っ

ていた。赤い液体が流れてくる先を見据えると全身の皮膚が剥がれ落ち。人とは言い難い人型の赤いモノが地面をえぐり転がり落ちており、その人型はほんの数秒の間「ケラケラ」と笑い声を上げる。
それを間近で見ていた人々は畏怖の表情を浮かべて、逃げまどい。そして、その人型は数秒後、突然動かなくなり息絶えた……。

★

とある衛星都市に立ち並ぶ雑居ビルの一角にはロストビルディングと呼ばれる都市伝説があった。見た目は何の変哲もない少し古ぼけた雑居ビルなのだが、誰もその建物に入る事が出来なかった。
確かにそこに存在し目に見えているのにも関わらず、近づけば近づくほど遠退いて行く蜃気楼のような不思議な建物だった……。

『昨晩、十代後半の男性とみられる遺体が発見されました。遺体の損傷は激しく全身の皮膚が剥がれ落ちた状態で見つかり、警察は一連の事件と――』
少しほこり臭くお世辞にも綺麗だと言えない散らかった部屋にテレビの音だけがBGMのように流れていた。そんな有様の部屋で唯一綺麗に片づけられたソファーの上に黒髪の少年、雨宮彗月（あまみやはづき）が寝転がっている。
「依頼だ」
物が積み上がり散らかった机に組んだ両足を我が物顔で乗せて座る赤髪のアップスタイルの女性、久遠寺美玲（くおんじみれい）がソファーで横になる彗月に冊子を投げ、それが彗月の顔に落ちる。
顔に落ちた冊子を彗月は拾い上げて横の態勢ながらも目を通し始める。
「今回の依頼は少しばかり骨が折れる。今し方、テレビで流れていた通り連続変死事件についてだ。私は一連の事件に巷に出回っている夢想薬が原因だと踏んでいる。君はどう思うかね？」

美玲はくわえていた煙草の火先を彗月に向けて意見を仰ぐ。
「そうですね。俺もそれが原因だと思いますけど、遺体の損傷具合から言ってかなりの量を摂取していたみたいですね。でも、おかしいですね。夢想薬の特性を考えれば……」
冊子に貼られたとある一枚の遺体写真を見つめながら彗月はそう答える。
遺体は焼け焦げたように皮膚が剥がれ落ちて血肉が丸見え、人体模型のような状態で写し出されていた。
「ああ、確かにな。適度に摂取する分ならラリってハイな状態になる程度だが……まぁ～自業自得って奴だ」
美玲は煙草を吸って心底どうでもいいと言った具合に切り捨てる。
そんな美玲の態度に彗月は鼻で笑う。
「でも、何で今さらこの依頼が来たんですか？　上はこれでおいしい汁を吸っていると噂を聞きますが？」
「あれだよ。大人の都合ってヤツだ。体面だけ取り繕って世間様にアピールするためだそうだ。まぁ～それは表向きで、上はとある噂を突き止めるため。我々に白羽の矢を立てたって事らしい」
垂れ落ちそうになった灰を吸殻で溢れ返る灰皿に落とし、美玲は再び煙草をくわえて吸い始める。
「噂、ですか」
彗月は眉間にしわを寄せて、感慨深くそう呟く。
「そう、何でも夢想薬を過度に摂取すると魔法遣いになれるらしい」
「なるほど、それが理由ですか……。でも、実際なれるんですか？」
「それは分からん。試しに飲んでみるか？」
そういうと美玲は机の上から夢想薬の錠剤が入った瓶を手に持ち彗月に提示する。その瓶を見て彗月は顔の前で手を振った。
「いえ、遠慮しときます」
「何だ、つまらん奴だ」

吸殻が溢れ返る灰皿に煙草を押しつけて美玲は不愉快そうな表情を浮かべる。
そんな美玲の態度に彗月はムスっと少し怒りを露わにし、
「じゃ～所長が飲んでみて下さいよ～」
口を尖らせて彗月は美玲に呑むように催促してみた。
「それはごめんだ。私は酒と煙草以外興味がない。あっ、それと金だ」
新たな煙草を口にくわえたまま指で輪を作り、お金を意を彗月に示すと、にやりと不気味に微笑む。
そんな美玲に彗月はやれやれと少し肩を落とし、起き上がりざまに辺りを見渡した彗月は他のメンバーがいない事に気付く。
「他の奴らは？　姿が見えませんが……」
「お前がソファーで気持ちよく寝ている間に他の奴らもこの件で出払っている」
「そうなんですか……。だったら、俺は行かなくていいですよね？」
「そうはいかないな。君にも働いてもらわなきゃ困る。言っただろ？　骨が折れる仕事だとね」
再びソファーで惰眠をむさぼろうとした彗月を制止しようと美玲は仕事をするように促しつつ、ふぅ～、と白い煙を吐いた。窓も開けず空気が淀んだ空間の中で吐いた煙が美玲が座っている周辺に留まり少し煙たくなったためか、たまらず美玲はゴホゴホと咳き込んだ。
それを見ていた彗月はふむふむと小首を振り何かいい案でも浮かんだのか頷く。
「だったら所長も運動がてら働いてはいかがですか？　健康にいいみたいですよ」
「それは断る。ほら、私の白くて美しい柔肌が太陽に焼かれて溶けてしまうだろ？　それにだ。事務所を留守にする訳にはいかん。空き巣に入られたらどうするか」

白いブラウスの裾をめくり上げて自ら自慢するだけの事がある白くて透明感のある美しい柔肌の腕を自慢げに彗月に見せつけた。
「その設定はどうかと思いますが……。それにそもそもこの事務所には所長の人払いのルーンを張り巡らせているじゃないですか。だから、常人にはたどり着けませんよ。うん、これで心配事はなくなりましたね。所長も手を貸して下さい」
「手を貸したいのは山々だが、断る。私にも私なりの仕事が有り余っている。見ろ、この書類の山々を……。今にも崩れ落ちそうではないか」
自慢げにそう言って美玲は机の上に山のように積み上がった書類をご覧あれと言わんばかりに手を広げて披露する。
そんな彼女に彗月はあきれたように頭を掻く。
「いや、それって単なる所長のサボり癖が原因じゃないんですか？」
「それは違うな。皆が仕事で苦しんでいると思うと私も居ても立っても居れなくてな。同じように苦しみを味わおうと溜め込んでいるにすぎない」
「だったら、溜め込まない内に終わらして仕事を手伝ってくださいよ」
「むっ、ああ言えばこう言うな君は……。それじゃ～女にモテんぞ」
額を押えバツが悪そうな表情を浮かべて美玲は口ずさむ。
「ほっといてください！」
少し語気を強めて言った後、彗月は立ち上がり腕を頭上に掲げて伸びをする。身体がなまっていたのか骨がパキポキときしむ音がした。
渋々ながらも出かけるために足の踏み場も定かでない、物で散らかり放題の部屋に残された小さな足場を縫うようにして事務所の入り口の方へとつま先歩きで彗月が進んでいると、
「ああ、彗月。一つ頼まれ事を頼まれてくれんか？」

次の一歩を踏み出そうとしていた時に美玲からお呼びがかかり彗月は片足立ちの状態で高く積まれた段ボール箱の隙間から美玲の姿を捉えた。

「何ですか？」

「煙草が切れた、頼む」

煙草を口にくわえたまま机に向かいふてぶてしい態度で空になった煙草の箱だけを段ボールが高く積まれた事務所の入り口辺りに提示する。

煙草の空箱越しにふてぶてしい態度の美玲の姿を隙間から見えていた彗月は大きく嘆息を吐く。

「了解で～す」

力無く返事をしてから、床に散乱した美玲の私物である年季の入った本を踏まないよう慎重に一歩ずつ隙間を縫うようにして進み――ようやくたどり着いた入り口のドアノブを掴んだ。

すると、入り口の上に掛けられた波形の長針と短針だけの装飾品がジリジリと音を立ててゆっくりと動き、六時十四分なのか十八時十四分なのか定かではないその辺りを指して、チンとベルの甲高い音が鳴る。

それと同時に彗月は扉を開けて事務所を後にした……。

「全く、素直に頼み事も受けれんのか」

誰も居なくなった事務所で一人寂しくボヤキながら美玲は溜まりに溜まった書類の山に手を伸ばして仕事に取り掛かった……。

第一章〜夢見る愚者と軟派男〜　其の一

――歓楽街某所。

昨夜、起こった事件現場からさほど離れていない場所なのだが、往来する人々は昨日起こった事を忘れているかのように闊歩していた。夜は光輝くネオン街と化すこの場所は若者たちがたむろし、怪しげな看板などが無造作に立ち並ぶ。メインストリートと並行して伸びる裏通りだ。

そんな若者たちの街と言っても過言ではないこの場所に溶け込む、少し茶色掛った髪に金色のメッシュを入れ込み、両耳にはクロスのイヤリングを身に付け。五芒星を象った校章が刺繍された白いブラウスの胸元を開け、赤と黒の格子柄のズボンを履き――見るからに軽薄そうな少年、牧瀬流風（まきせるか）が携帯電話を片手に軽やかなステップを踏みながら歓楽街を歩き回っていた。

流風は久遠寺美玲の事務所で働きながら私立高に通う学生だった。見た目とは裏腹に成績は常に上位クラスなのだが、いかんせん流風の性格が足を引っ張り敬れる事は無く、後輩からはタメ口で話されることしばしば……。

そんな流風は現在、美玲が承った依頼の件で情報収集をしていた。最近、多発している連続変死事件に関係していると思われる夢想薬。他の麻薬と違い依存性は極めて低く主に鬱症状の人々が服用している。その効果は絶大で国も認めるいわゆる合法麻薬と呼ばれる夢想薬が多く出回っているこの歓楽街で情報収集するのが一番だと踏み、流風は手当たり次第に往来する人々に声を掛けて回っていた。

「ねぇねぇ。そこのお嬢さん方。ちょっと聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

営業外でシャッターを下ろしていた軒先に座りこむ二十代前半の化粧が少し濃い目の若い女性二人に軽い口調で話しかける。

「何ぃ〜お兄さん？　もしかして、ナンパぁ？」

流風の呼びかけにアイシャドーでパンダのように真っ暗な目元になっている女性が少し面倒くさそうに答える。
「違う違〜う。僕は少〜し世間話をお嬢様方と交わしたいと思いましてねぇ〜」
手を前で振り否定するものの携帯電話を片手に軽い口調で話しかける流風の姿はナンパをしているようにしか映らない。
そんな彼の姿を目の当たりにしている若い女性たちは少し険しい表情を浮かべる。
「だったら、何で携帯片手で話しかけてくんの？」
「ウチらとメアド交換したいからでしょ？」
と、チークでおかめのように頬が赤いもう一人の女性が気だるそう口走る。
「ああ、これ？　違うんですよ。僕、今はやりの携帯電話依存症なんですよ〜。携帯電話を手放しちゃうと禁断症状でちゃうアレですよ〜」
あはは、と頭を掻きながら若い女性たちの警戒心を解こうと弁解する。
流風が常に携帯電話を片手に持つのには理由があった。上司である美玲にいち早く連絡を取れるようにするためと目紛るしく変わるネット上に散らばる情報をかき集めて常に最新情報を仕入れるためであった。
「ああ、分かるぅ。携帯のない人生なんてありえないっしょ」
「そうそう、軽く死ねるよね〜」
『キャハハハ！』
流風の話に共感を得たのか急にテンションを上げ、手を叩きながら周りの視線なんてお構いなしに下品な笑い声を上げる二人。
「ええ、そうなんですよ〜。分かってもらえたみたいでよかったぁ」
ふぅ〜、と流風は胸に手を置き警戒心が解けてホッとする。
「で、お兄さん。ウチらとどんな世間話すんの？」

パンダメイクの女性がキーホルダーをわんさかぶら下げた重たそうな携帯電話をいじりながら投げかける。
話を振られた流風はさっそく本題に入るのもしゃくだと思いワンクッションを置くために本当に世間話をする事にした。
「そうねぇ～。今、この街で流行ってる――」
「ああ、ルクエラぁ？」
と、流風がまだ言い終わっていないにも関わらず、おかめメイクの女性が間髪容れずにそう答える。
「ルクエラって？」
情報収集家の流風でも聞き覚えがないワードに首を傾げて少しきょとんとなった。
『お兄さん知らないのぉ～？　おっくれてるぅ～』
ルクエラを知らない流風を二人は小馬鹿にしたような態度で茶々を入れる。
「すいませんねぇ～。僕、流行りものに疎いんですよぉ～。そんな僕のために優しく教えてくださいな」
彼女たちの小馬鹿にした態度に流風は嫌な顔一つしないで手を合わせて軽い口調で教えを請う。
「すっごい、飛べる魔法の薬」
と、少し低いトーンでおかめメイクの女性がそう答えると、
「ああ、そういう系ね……」
彼女の言葉に流風は少し気分をそがれたような表情を浮かべる。それに気付いたパンダメイクの女性が眉をひそめて、
「あれぇ？　ノリ悪いね、お兄さん」
「いえいえ、そんな事ありませんよぉ～」
手を前で振り否定しながら流風は本来の調子の軽い口調で誤魔化す。
「そう？　でも、マジでオススメだよ。ルクエラ」
流風の態度に首を傾げて違和感を感じながらも納得したのか気を取り直してルクエラを本意気で薦めた。

「は～い、縁があったら今度試してみますよぉ。って、そうじゃないんです！」
ノリツッコミのようなノリでルクエラの話を切り、ゴホンと一息入れた流風は徐に口を開いて、
「夢想薬について意見を交わしたいなぁ～」
と、本来の目的である夢想薬の話題にスイッチした。
『……夢想薬？』
若い女性たちは流風の言葉に聞き慣れないといった風に首を傾げて呆けた。
そんな彼女たちの反応に流風はあちゃ～と額を押えて少しよろける。
すると、パンダメイクの女性が何か思い出したのか嬉しそうに手を叩くと、
「ほら、あれだよ。一昔に流行ってたアレ」
「ああ、あれね。陰気な奴らが飲む奴ね」
思い出して嬉しかったのか抽象的な言葉で言ったパンダメイクの女性とは対照的におかめメイクの女性はクールな反応を見せた。
「でも、お兄さん。なんで今さら夢想薬の事を聞くの？　もう、時代遅れだよ」
「ちょっとした興味本位かなぁ？　それにしても夢想薬が時代遅れって世間様の時代の移り変わりはやけに早いんだねぇ～。夢想薬が世に出回って確か……三、四カ月ぐらいしか経ってないっしょ？」
「そうだっけ？」
「覚えてな～い」
「さいですか……」
彼女たちの適当な返事にがっくし、と流風は肩を落としながらも話を続ける。
「まぁ～それはさておきですねぇ。お二人さんは夢想薬にまつわる噂ってご存知？」
「何々？　急に都市伝説ですかぁ？」

「まぁ～そんなとこ。知らなきゃ別にいいんですけどねぇ～」
「で、お兄さん。その噂って？」
パンダメイクの女性を余所目にさっさと話を終らしたいのかおかめメイクの女性が噂について追及する。
「え？　そうねぇ～」
少しはぐらかすように視線を彷徨わせて間を開けた流風はゴホンと咳払いをし、
「例えば……夢想薬をたくさん飲むと魔法遣いになれる、とか」
さっきまでのおちゃらけた雰囲気を漂わせていた流風とはうって変わって引き締まった表情になり澄んだ瞳で彼女らを直視し、低い声音の真剣身の帯びた声で口ずさむ。
「はぁ？　まほうつかい……？」
「キャハハハ。マジで都市伝説みたいな話してんの。超ウケる～」
「結構マジな質問だったんだけどなぁ～。とほほ」
二人にまともに相手をされず肩を落として俯いた流風は本来の軽い調子に戻っていた。
「落ち込まないでよ～。お兄さん」
「そうそう。もし、なんか分かったら――」
「そう？　連絡くれるぅ？　僕、うれしいなぁ～。じゃ～何か分かったらここに連絡ちょうだい」
相手がまだ話している途中で了承も得ていないのにも関わらず、流風はブラウスの胸ポケットから生徒手帳を取り出して、そこから黒い紙を手に取り若い女性たちに押しつけるように渡す。
「それじゃ～ご縁があったら、またぁ～」
黒い紙を押しつけるように渡してから逃げるように流風は軽快な足取りでその場を離れていき、人々が往来する人ごみに紛れ込んで姿をくらました……。
その軽やかな動きに若い女性たちは呆然としてほんの数秒間の間フリーズをし、我に返ったパンダメイクの女性が徐に口を開いて、
「で、何これ。名刺？」

と、言い。眉間にしわを寄せ、しかめ面で黒い紙を確認する。
黒い紙には金色の文字で「牧瀬流風。十七歳。ただいま彼女募集中で～す」とメールアドレスと携帯電話番号が書かれており、その文字を金色の植物のツルで囲うようにデザインされた名刺だった。
「結局、ナンパだったんじゃね？　それも新手の」
パンダメイクの女性の疑問におかめメイクの女性が気だるそうに答える。
その後、若い女性たちは首を傾げながら互いを数秒間見つめ合い、自分たちがいつのまにかナンパされたんだと勘違いした。
『キャハハハ。マジウケるぅ～』
手を叩き下品な笑い声を上げて、二人は名刺をぐしゃぐしゃに握りつぶしてその場に投げ捨てた……。

第一章～夢見る愚者と軟派男～　其の二

人ごみに紛れて姿をくらましていた流風は人が歩く流れにそって少し俯きながら歓楽街を南下していた。

そう、牧瀬流風は気落ちしていた。

いくら情報収集とはいえ、聞きたくもない胸糞悪い話を聞かなくてはならない。先の女性たちが話したルクエラと呼ばれる麻薬の話題でもそうだった。流風はあまり女性にそういう類のものに手を出してほしくないと思っていただけに少しダメージを受けていた。

だが、流風はすぐに気持ちを切り替えて次なるターゲットを模索し始めた。彼にとっては日常茶飯事の事で一々くよくよしてもしょうがなかったからだ。それにいざとなればネットワークの力を拝借すればいいと踏んでいた。

辺りをキョロキョロと見渡して次なるターゲットを見つけた流風はそのターゲットに近づいて行こうとしたその時、人ごみの中を横切る見慣れた人物を発見する。

その人物は流風と同じ五芒星を象った校章が刺繍された白いブラウスに黒いタイを身に付け。赤と黒の格子柄のズボンを履き、無造作に肩まで伸びた黒髪をなびかせて凛々しく歩く女の子のような顔つきの少年だった。

「お～い、彗月く～ん。こっちに来てたんだぁ～」

と、手を振って名前を呼び。人ごみを掻きわけながら彗月に近づいて行った。

そして、挨拶代わりに彗月の肩をポンと叩く。

すると、彗月は肩を叩いた流風の手を掴み、

「気安く触れんな、カス」

振り向きざまに鋭い目つきで睨みつけて叩きつけるように手を振り払った。

そんな彼の悪態に流風は振り払われた手を胸に置き目を瞑って天

を仰ぐ。その瞳からは一筋の涙が頬を伝って流れていた。
「邪魔だ。どけ」
人が歩く流れを遮るように天を仰いで突っ立ってた流風にぶつかりざまに誰かがそう苦言を呈した。
「すっすいましぇ～ん」
少しよろけながら誰に対して言ったのか分からない言葉は喧騒に打ち消されてしまう。
はぁ～、都会って手っ厳しいなぁ～と呟きながら流風は彗月が歩いて行った方角に足を進めて彼を追いかける。
人ごみを掻きわけて裏通りから横道にそれて、ラブホテルが立ち並ぶ路地通りを突き進んだ先にさきほどの通りよりも数倍多い人が行きかう歓楽街のメインストリートに出た。
片道三車線の大通り。
遠方からでも見える一際大きい電波塔に向かって伸びる幹線道路の歩道では洋服を優雅に着飾ったマネキンたちが陳列されたショーウィンドーが立ち並び、ウィンドショッピングを楽しみながら人々は歩いていた。
道路を挟んで中央分離帯には道路と並行して伸びる緑地があり等間隔で植えられた木を囲うようにして造られたベンチや移動販売カーが停車し。その前では日よけのパラソル、椅子とテーブルをセッティングしてオープンカフェなどがある。
歩行者の憩いの場と言っても過言ではないその場所で額を押えてげっそりと俯いた姿でベンチに座っている彗月を発見した。
すぐさま、現場へ急ごうとする流風だったが大通りの信号機はなかなか青に変わらず足踏みしていた。
青に変わるまで流風は腕を組んで指をトントンと動かしてリズムを刻む。
信号待ちでイライラして行っている訳でもなかった。彼の癖のようなものだった。
道路によって違う、信号が変わる時間を指を動かして時間を計っ

ていた。こういう大通りではだいたい九十秒で信号が変わると把握していた流風はリズムを刻みながらその時を待っていた。
ピヨッピヨッと鳥のような鳴き声が鳴ったと同時に信号が青に変わり流風は小声でビンゴと呟きながら指をならし、その動作の流れから銃口を向けるように信号を指さしてキザな態度を取る。
「お～い、彗月く～ん」
ベンチにげっそりとして座っている彗月に手を振りながら駆け寄り、流風は隣の空席に腰かける。
「どぉったの？」
俯く彗月の顔色を窺うように覗きざまに流風は少し軽い口調ながらもそう述べた。
「……酔った」
周りの喧騒に打ち消されんばかりの小声でそう訴え、彗月は今にも吐き出しそうな程に顔面蒼白で顔色が悪かった。
「ああ、例のヤツね……」
彼の言葉に流風は上体を少し後ろに反り天を仰ぐような態勢を取り、頷き納得した。
彗月が酔ったと体調不良を訴えた原因を流風には心当たりがあった。
彼、雨宮彗月は人が大勢闊歩する場所が苦手だった。
人ごみの雰囲気にあてられる人酔いも一つの原因としてあるにはあるのだが、一番の原因は人が身につける香水や化粧などの匂いだった。獣並みの嗅覚とまではいかないけれど変に鼻が利く彗月にとって。どれほど良い製品、良い香りだと絶賛されようがどれも粗悪品、悪臭でしかなかった。
そのため、彗月は人が多い所では不機嫌になり周りに当たり散らすことしばしば……。
「……何でこんなに人が多いんだ、こっちは」
彗月は視線だけで辺りを見渡し、嘆くように呟く。
「まぁ～都会だからねぇ～」

「……都会怖い」
足をベンチに乗せて体育座りのような状態を作り、その三角に折られた足の膝に額を乗せてうずくまりながら彗月は身体を震わせる。
「ちょっとちょっとちょっとぉ～。何かナーバスになってない？　本来の調子に戻ってよ～。こっちが調子狂っちゃうよ」
「本来の調子？　ああ、そうか……。多いんなら減らせばいいんだ」
と、頷きながらそう呟いた彗月は唐突に立ち上がる。
そして、口元を歪ませ不敵な笑みを浮かべ。身体を揺らしながら一歩、二歩と足を進めた彗月は腰の辺りに左手を伸ばして、そこに何かモノがあるかのように空気を掴み、その何かを抜き取ろうと右手を伸ばした所で、
「なっ、何、物騒な事言っちゃってんのさ！」
流風は急いで立ち上がってその右手を掴み、制止させた。
彗月の突然の行動に相当焦ったのか、おびただしい量の汗を額に滲ませた流風がそこにいたが、彗月をほっといても何も起こる事はなかった。その事を流風も重々分かってはいたのだが、焦って冷静さを欠いてしまっていた。
「まぁ～そっちの方が本来の調子っぽいのには納得ですけど……」
ふぅ～、と一息吐いてから、常に常備しているのかズボンのポケットからハンカチを取り出して額の汗を拭う。
少し落ち着いてから彗月をベンチに座らせて流風も隣に腰を掛け、人ごみの多い都会に珍しく足を運ぶ彗月に疑問を感じた流風は訳を聞く事にした。
「で、彗月くんは何でこっちに来たの？　ショッピングって事は……うん、ないよね」
「ん？　ああ、依頼だよ。ほら、こっちで多発している連続変死事件の……」
「彗月くんもその件で動いてんの？　かぁ～それだけデカイ山って事かねぇ～」

彗月から理由を聞かされた流風は目を見開き、事の重大さに気付いてあからさまに驚いて見せた。
流風は彗月が動くまでもない簡単な依頼だと思い動いていただけに彗月が動いてる事を知り度肝を抜かされたようだ。それだけ彗月の事を流風は一目置いていたのだろう。
「いや、そうだったら。所長も動くだろ」
事を大げさに表した流風をたしなめるように言い聞かせ、彗月は冷静な対応を見せた。
そんな彼が言った言葉に少し疑問に感じた流風は眉間にしわを寄せる。
「……彗月くん。美玲ちゃんの性格を考えたらそれはあると思うかね？」
「……ない、な」
流風の質問を考える事もなく反射的に彗月は頷きながら即答する。
「だしょ？　たぶん、適当に理由を付けて彗月くんを追っ払いたかったんじゃない？」
「言われてみればそうかも知れない。事務所を出るときに煙草を頼まれたし。書類が溜まってたし……」
指折り数えながら美玲が自分を追っ払うために使用した理由を述べていく。
「書類はいつもの事でしょ……。でも、大方外れてなかったみたいね。僕の推理」
流風の言葉に彗月は首を傾げて疑問符を頭上に掲げているような間の抜けた表情を浮かべる。
間抜け面をさらす彗月に流風はやれやれと少し小馬鹿にしたような表情を露わにして、間接丁寧に推理を語り始める。
「自分が書類処理に追われている傍らでソファーの上でぐーたら惰眠をむさぼってる彗月くんの姿を見たくなかったんじゃない？美玲ちゃんの性格上、自分がぐーたらする分には大歓迎でしょ」
「ああ、確かに……」

流風の推理に腕を組んで大きく頷いて納得する。
「ホント、君も大変だねぇ～」
同情するかのように頷きながら彗月の肩を叩き、労いの言葉を贈った。
彼に労いの言葉を贈った後に流風は大変重要な事に気付いて目を見開き、口を開いて馬鹿面をさらした。
「あっ、僕もその人が上司だった……」
そう呟くと流風はがっくしと肩を落として俯く。
そんな彼にさっきのお返しとばかりに彗月も流風の肩を叩いた。
『はぁ～』
少し顔を見合わせた後に以心伝心の如く二人は同じタイミングで嘆息を吐いた。その嘆きも周りの喧騒に打ち消されて虚しさだけが二人の心に突き刺さる。
「で、彗月くんはこれからどうすんの？　事務所に帰るの？」
美玲に適当な理由付けで追っ払られたであろう彗月の動向を気にしてか流風はそんな質問を投げかける。
「いや、所長の煙草を買って帰らないと……。でも、俺未成年なんだよな～。流風、頼む。俺の代わりに買っといてくれ」
片手を顔の前に出して頼み込む彗月に流風は目を細くしてまじまじと見つめ返した。
「チミは変に真面目だよね……。先輩の僕には敬語なんて一切使わないのにさ～。それと僕もまだ未成年よ」
ブーブーと口を尖らせて先輩は少し不貞腐れてしまった。
そんな先輩の態度に首を傾げる彗月は怪訝そうな表情を浮かべる。
「だって、尊敬するとこ皆無じゃん」
「お兄さん、泣いていい？」
「それだけはやめてくれ」
「そう？　泣き演技に定評あるのにそれは残念」
「それ、どこで使うんだよ」
「ん～。泣き落とし？」

彗月の質問に首を傾げながら述べた今の言葉に彗月は目を細くして軽蔑したような視線を送った。
痛烈な視線を感じ取った流風は誤魔化すように苦笑いをしてその場を乗り切ろうとする。
それでも蔑んだ視線をやめない彗月のご機嫌をなんとかなだめようと流風はどう乗り切ったら良いか悩みに悩んだ結果、一つのアイデアが頭に浮かんだ。
「まぁまぁ～彗月くん。煙草はお兄さんが買っといてあげるからさ」
後輩の機嫌をなだめるためにパシリに買って出た一年先輩の牧瀬流風、十七歳、彼女募集中は白い歯を光らせてはにかんで見せる。
「そうか……。じゃ～俺もこっちに来たからには手伝うよ」
彗月が立ち上がって頭上に腕を上げて伸びをし、仕事をしようかとやる気を見せた。
予想外の――予想以上の反応に流風は少しきょとんとする。
成り行きとはいえ美玲のパシリを自分が引き受ける事になり、美玲の命令は絶対ながらもサボり癖がある彗月はいつものように惰眠をむさぼる為にどこかに姿を消すのかと思っていたからだ。
「そう？　まぁ～あんまり無理しないでね。人の多い所は僕とツインズちゃんたちに任せてちょうだいな」
「了解」
そう返答すると、彗月は軽く肩を回しながら気合十分といった具合に苦手な人ごみに飛び込むように歩き出した。
しばらくして、人ごみの中をたった数十秒歩いた所で彗月は心が折れたのか肩を落として俯きながらのそのそと歩くようになり、そのまま人ごみの中へと消えて行った……。
その様子を人ごみの隙間を縫うようにかろうじて見えていた流風は額を押える。
「……ホント、大丈夫かなぁ～」
彗月の情けない姿を目の当たりにして少し不安感を抱いた流風は

頭を掻いて、大きく息を吐いた……。

第一章～夢見る愚者と軟派男～　其の三

薄暗い照明が照らされた個室の中、流風は携帯電話ではなく紙コップを片手にパソコンの前に鎮座していた。

あの後、彗月と別れてから流風は裏通りに再び戻って調査を開始していたのだが、彗月の情けない姿がちらちらと頭の中で何度も再生されて気になってしょうがなかった。だから、早くも最終手段を使用する為にネットカフェを見つけて現在に至る。

ネットカフェに到着してからは終始パソコンの画面を食い入るように見つめていた。

その片手間、携帯電話で「夢想薬についての噂を求む」とチェーンメールを送り、今話題のＳＮＳでも情報を呼び掛けていた。

「はぁ～全く……。嫌になっちゃう」

ネットサーフィンをしていた流風は嘆くように呟く。

どこもかしこも「夢想薬で夢が叶った」や「夢想薬で想い人に想いが届いた」などと言ったガセネタばかりで気が滅入っていた。

売人たちがよく使うキャッチフレーズに酷似していた事に気付いた流風はこのサイトは売人達が立ち上げたのだと踏む。

夢想薬は国が認める合法麻薬だが、密売などの行為自体は認めていなかった。

しかし、今回は噂の真相について追及するだけであって売人たちをどうこうする訳ではなかった。それにすぐに摘発されて捕まるだろうと思った流風は他に噂について手がかりがないか再びネットサーフィンを開始する。

検索ワードを変えて表示された検索ページをスクロールしていくと気になるワードが出てきた。

「魔法遣いになるまでの軌跡とその末路」と意味深なタイトルが表示されたサイト名に流風は目をやられる。

「もしかして、これビンゴかも」

すぐさまサイト名をクリックしてページを開く。
『ようこそ、魔法遣いを夢見る愚者たちよ。そして、真実を知りたい勇者たちよ。私はお前たちを歓迎する』と文字が表示されて数秒経過したのちに別のページにジャンプした。
飛ばされたページには、動画が添付されていた。
流風はその動画の中から一つ気になる動画を見つけた。タイトル「空歩く少年」と名が付けられた動画だ。
すぐにその動画の再生ボタンをクリックして流風は動画を見る事にした……。

「やぁやぁ～。この動画をご覧の諸君たち。君たちはこれから歴史的瞬間を目の当たりする事になるだろう。それは人が空を歩くという偉業を成すといったものだ。さぁ～ご覧あれ～」
目元に水玉模様が描かれた白い仮面を被った黒装束のダミ声の人物が画面上に現れてこれから起こるであろう現象を説明した後に丁寧にお辞儀をして画面から引いた。そして、映像は黒装束の人物が画面から引いて映らなかった後ろの画が露わになる。
どこのかの夜景の映像だった。
映像はある画にピントを合わせてズームしていく。
徐々に露わになっていくその画は少々映像が粗いものの大きな鉄柱が幾重にも交差しあいながら天高く昇っていく、ライトアップされた鉄塔が映し出されていた。
この鉄塔に流風は見覚えがあった。
それはここ衛星都市一番と言っても過言ではない高さを誇る高層建築物である電波塔だった。
さらにズームしていく映像は電波塔の上層辺りまでいき、何かを探しているかのように上下左右とブレた映像が数秒間続いた。そして、ようやく標的を発見したのかある一角に合わせて映像がブレなくなり、ゆらゆらと揺れ動く物体が電波塔の外郭部分に映し出される。

その物体を追うようにしてアングルが動き、徐々に揺れ動く物体をズームしていき、その正体が明らかになった。映像のタイトル名通りごくごく普通の十代半ばぐらいの少年が踏み外したら即、死に直結のめまいを引き起こすほどの高さを誇る鉄骨の上を両手を広げて、あたかも綱渡りをするピエロのように臆する事なく悠々と歩いていた。

「動画をご覧のみなさん。これからあの彼が空を歩きます。瞬きするのがもったいないほどの奇跡。さぁ～眼球が乾ききるまでとくとご覧あれ。Ｉｔ’ｓ ａ Ｓｈｏｗ Ｔｉｍｅ！！」

視聴者を煽るような売り文句でダミ声が流れて指をならす音が鳴ったその時、少年はさらに両手を大きく広げてそのまま宙に足を進めた。

少年の身体は宙から落ちる事無くそこに足の踏み場があるかのように悠然と歩き、軽いステップまでもやって見せる。

映像に映る少年は本当に楽しそうに空を掛け回っていた。

少年の鼻歌が映像を通して聞こえてくるかのように本当に、純粋に今起こっている事を楽しむ無邪気な子供のように見受けられた。

けれど、少年は突然立ち止まって空中に倒れ仰向けになる。

そして、徐に手を上空に翳して何かを掴み取ろうと何回も何回ももがき始めた。

彼は一体、何を掴み取ろうとしていたのか映像からでは分かりかねたが、流風は映像に映し出された夜景から星を掴み取ろうとしていたのではと推測してみる。

すると、映像に映る少年に異変が起こった。

少年の身体が徐々にではあったが宙から落下していくように見えた。地球の引力に引っ張られるように落下していく少年の身体から白いモヤが出始める。

そして、少年の身体が発火。炎に包まれながら地上へと落下していく途中で建物が少年の姿を遮るように現れて映像から見切れてしまった。

「以上だ。この動画をご覧の諸君たちは夢叶えた愚者として果てるのか、はたまた真実を知る勇者として生き長らえるか。それは君たち次第だ！」

と、最後にダミ声が流れて映像はそこで終わった。

「一時的とはいえ、本当に魔法遣いになったって事？　でも、それは……」

夢想薬の過度の摂取による副作用。でも、そのような副作用がある事など牧瀬流風はもちろんの事、久遠寺美玲もにわかに信じていなかった。だが、宙から落下する際に見られた少年の身体が燃え上がる現象には心当たりがあった。

以前、鬱症状がみられた人物が夢想薬を過度に摂取して火傷のような痕が体中に発症した事例が稀にあった。

確かに夢想薬を飲むと副作用として高揚感が増して陽気な気分――所謂、ラリってハイになる状態になる事ともう一つ。体中が燃えるように熱くなる……火照ると言った症状が見受けられたが映像の少年のように燃え上がる事などまずなかった。ましては、魔法などの超能力が扱えるようになる事もない。

しかし、映像には少年が宙を歩く様子や身体が燃え上がって果てていく姿が映し出されていた。

「どれほどの量を飲めばこんな事になる？　いや、そんな事よりもこの映像って……」

流風は昨夜起こった事件の事を思い出した。

確か、空から炎に包まれて人が落ちてきたと。その人は落下中に亡くなったのかはたまた落下して亡くなったのかは不明だが、噂では落下してから数秒間は生きていたと……。

そして、その間にケラケラと笑い声を上げたと言う話があった。

「つまりこの映像は昨日起こった事件の映像って事？　もし、そうならこの映像を映した人物が今回の事件の犯人であり夢想薬の噂を流した根源って所かな？」

他に何か手掛かりがないか、サイトをスクロールしていくと「魔法遣いを夢見る愚者たちへの日記」と呼ばれる項目を発見した。このサイトを立ち上げた管理者のブログなのだろうかと疑問に思いながら流風はそこにカーソルを合わせてクリックする。

表示されたページには項目名通りの日記調に残された何かの記録と思わしき文章が現れ、流風は日付が古い記録から閲覧しようと考えて日付を遡っていった。

古いページを遡りスクロールといった行動を繰り返ししていくと一番古い日付の記録に辿り着いた。

タイトル「妄言者」と名付けられた記録を見つける。しかし、日付が少々おかしい事に流風は気付く。

「あれ？　一年前の日付？　夢想薬が世に出回り始めた時期を考えると少しばかりおかしい。一年前というと一部関係者しか夢想薬の存在は知らなかったはずだし……」

ふむ、と唸りながら流風は記録を見る事にした。

本日、プロジェクトが始動した。

しかし、本当にこのプロジェクトを始動しても良いのだろうか？

私は少し不安を抱いた。

だが、上はこのプロジェクトを推進する。私は上の命令に従う傀儡でしかない。

だから、この気持ちはただの思い過ごし、傀儡ごときが抱く感情ではない。

そう、私は傀儡だ。何にも動じず、何にも感じず……。

「プロジェクトって、何？　夢想薬についての？　だとしたら、この記録は夢想薬を開発したプロジェクトについての記録って事？

何でそんなものがこんなサイトに？」

疑問を残したまま流風は続いての記述を読む事にした。

タイトル「エラー」

プロジェクトを始動して早一ヶ月が経とうとしていた。
着々と進む新薬開発。
傀儡らしく私も黙々と研究に没頭した。
新薬の試薬が完成し、試飲は外界でその存在を抹消された者たちが行う事になった。
なぜ、この者たちが存在を抹消されたのか傀儡である私も他の研究者たちもその経緯は存じ上げないが私たちは何も考えず私たちが成す事をするしかない。

タイトル「光縋る者」

実験を開始して約三十六時間経過。
新薬の試薬を試飲した被験者の一人に異変がみられた。
被験者番号二〇八がベット上でもがき始めたのだ。
拒絶反応でも起こしたのだろうか？
しかし、二〇八は苦しさのあまりもがいている風には見えなかった。何かを掴もうと必死に腕を伸ばしていた。
彼が伸ばす先には薄暗い部屋を照らす豆電球が揺られながらチカチカと点滅していた。
それともう一つ。これは私の気のせいかも知れないが二〇八がいた周辺だけ妙に肌寒かった……。

タイトル「浄化の炎」

異変がみられてから数十分後。
唐突に二〇八は動かなくなった。
豆電球を掴み取ろうと伸ばしていた腕もベットから垂れさがっていた。

けれど、二〇八の視線だけは豆電球から離れる事はなかった。
それどころか、二〇八の身体から蒸気のようなものが発生していた。
一体、何が起こったというのだろうか？
蒸気のようなものが発生してから数分後、二〇八の身体が発火。ものの数秒で全身が炎に包まれて燃え上がった。
そして、二〇八は奇声を発した後に息絶えた……。

記述を読み終えてから流風は大きく息を吐く。
深く、長い一息を。瞳を閉じて感慨深く、ゆっくりと……。
「夢想薬を製造するために世界から存在を消された人々……つまり、死刑囚を使って人体実験を行っていたって事、か。夢想薬にそんな裏事情があったなんて知らなかったなぁ。それとさっきの映像に映ってた少年と酷似した症状が研究中にも現れてたみたい。つまり、この二〇八って人も一時的とはいえ魔法遣いになったって事、か。でも、映像の少年と違い二〇八って人は魔法遣いになったって自覚がないっぽいね。少年は自ら宙に足を進めてた訳だし……。まぁ～実験途中だし何が起こるか分からないって所かね」
流風は飲みかけの飲料水が入った紙コップに手を伸ばしてそれを一気に飲み干した。
そして、ポケットに入れていた携帯電話に手を伸ばして夢想薬の噂について呼び掛けておいた返答が来ているのかどうか確認する事にした。
まず、チェーンメールの返事を見る事に。すると「夢想薬の噂？そんな事よりも今度いつ遊べるの？」などと言った返信が多数寄せられていた。
そんな返答の数々に流風は頭を掻く。
続いて、ＳＮＳの方も確認しようと操作していると突然、着信音が大音量で鳴り響いた。
マナーモードをいつの間にか切ってしまっていたのか、着信音が

鳴って驚いた流風は慌てて着信相手も確認せずに出る。
「は、彗月ちゃんが吐いてしまったのです！　ど、どうしたら良いでしょうか！　救急車ヘルプ！　ヘルプミーで～す！」
着信相手も相当慌てていたのか、声が上擦っていた。
相手の上擦った声を聞いて流風は失礼ながらも笑ってしまった。彗月が吐いてしまった事にではなくて普段、声を滅多な事では張らない女の子からの電話だったため流風は思わず笑ってしまったのだ。
「鳴（めい）にゃん、もち着いてもち着いて。この番号じゃ救急車は呼べないよん」
「……えっ？　その声は流風ちゃん？」
流風の言葉に落ち着きを取り戻したのか、着信主がか細い声でそう返答する。
「うんにゃ」
彼女の質問に流風は深く頷いて返答した。
その返事を聞いて着信主は電話をする相手を間違えた事に気付いて、あわわわと声にならない奇声を発して照れ始めた。
その奇声を受話器越しに聞いていた流風はニヤニヤと口元を緩めて不気味な笑みを浮かべていた。相手がどういう状況になっているかを想像して笑っているようだ。
「ご、ごめんなさい！」
「いやいや、一々そんな事で謝らないでくださいよぉ。そんな鳴にゃんにいつもいつも二八二八させてもらってますよ。あざ～す！」
「にやにや？」
流風のにやにや発言に何か疑問に感じたのか着信主は聞きなおして来た。
そんな彼女の反応につい本音が漏れてしまっていた事に気付いた流風は己の失言を反省するかのように頭を軽く小突く。
「ゴホン。それは大人の事情って事で詮索は無用の方向でお願いしや～す」
「そう、ですか？」

「ええ、そうですとも。まぁ～あれですよ。彗月くんの事、よろしくね」
「は、はい！」
さっきの疑問は何もなかったかのように元気に返答する着信主に流風はふぅ～と息を吐いて胸を撫で下ろした。素直な子で良かった～と内心喜びつつもなぜか胸の辺りがズキンと痛くなり流風は疑問に感じながら胸の痛みをかばうように手で押さえる。
「……鳴にゃん。おかしな事を聞くかも知れないけれど聞いてくれるかな？」
「い、いいともぉ！　……です」
なぜか、ミーハーな感じの返答した着信主だったが、途中で恥ずかしくなり、またもや声にならない声を上げて照れ始める。
そんな彼女の反応に反射の如く不気味な笑みを浮かべた流風だったが、ニヤニヤしている場合じゃないと首を左右に振り正気に戻る。
「今、僕の胸の辺りがズキズキと痛むんだ。これってどういう事なんだろうね」
「えっと……こ、恋じゃないでしょうか？」
「なるほろ。この胸の痛みは恋の痛みとな？」
「だと思います」
ふむ、と唸りながら流風は少し考え込んだ。最大のミスを犯している事も知らずに馬鹿正直に考え。そして、答えを導き出した流風は一息入れて気持ちを入れ換えた。
「鳴にゃん！」
「あっ、はい！」
唐突に声を張り名前を呼ぶ流風に対して着信主もそれに応えるように少し声量を上げて返答する。
「第一印象から決めていました。僕と付き合って下さい！」
流風は立ち上がり自分以外誰もいない個室の中、携帯電話を片手に空いた手を前に差し出して丁寧にお辞儀をした。まるでフィーリングカップルに参加しているかのような告白の仕方だった。

「ご、ごめんなさい！」
「即答？」
ちっとも悩む間もなく着信主に即答されて、がっくしと肩を落として席に着く。
胸の痛みが恋の痛みから失恋の痛みへとシフトチェンジした流風だったが、元々の胸の痛みが恋の痛みじゃなく着信主を騙した事から来たただの罪悪感による痛みだったという事は当の本人は気付く事はなかった……。

第一章～夢見る愚者と軟派男～　其の四

電話を終えてから少し期待薄でＳＮＳを確認した流風だったが、その期待とは裏腹に少し気になる投稿を発見する。投稿者、偶像崇拝という方から「夢見る愚者」と名乗る集団が最近、頭角を現してきたとの情報が投稿されていた。

流風が呼び掛けた情報とは少しジャンルが違ったが、夢見る愚者というワードに流風は引っ掛かった。

夢見る愚者……。さきほど閲覧していたサイトにも「魔法遣いを夢見る愚者」と明記されていた。これは何かの偶然なのだろうか？

それとも……と、疑問に感じた流風は詳細を確かめるために夢見る愚者と名乗る集団が最近目撃された場所へと向かう事にした……。

ネットカフェを後にして、ＳＮＳに投稿されていた情報を元に流風はメインストリートに戻って最寄り駅である地下鉄を利用する。そこから歓楽街の北側へと足を運んだ流風は目の前にそびえ立つとある雑居ビルを見上げていた。

ここ衛星都市は電波塔を中心に北部と南部と別れており、流風がさきほどまで情報収集をしていた歓楽街は南側の位置にある。夢見る愚者と呼ばれる集団が目撃された場所は北側のオフィスビルが立ち並ぶオフィス街から少し離れた場所にあった。

「ここか……」

正面玄関側面に掛けられた、所々文字がぼろぼろと欠けたボロボロの門札に辛うじて第三ビルと描かれていた。

元々この第三ビルはどこかの企業が所有していたのだが、数年前に中心街の方へと移転してしまった。　そのために現在はテナント募集中状態のはずなのだが、立地が悪く買い手が見つかる事無くそのまま数年経ち、廃墟と化してしまった。

旧第三ビルとも呼ばれるこの建物に夢見る愚者と呼ばれる集団が

現在もたむろしているかも知れない中、流風は一人建物内に侵入する。
建物内は吹き抜けとなった窓から光が差し込むが少し薄暗くて長年放置していただけあってほこり臭く、所々ヒビが入り、配管や配線がむき出しのボロボロの内装だった。
一階のフロア内を探索し終わって、続いて上のフロアに向かう途中に一つ気になってしょうがない事があった。
「それにしてもさっきから臭うこの臭いは、何？」
流風は不快感をあらわにして鼻を少し腕で塞ぐ。
一階を探索中にも臭っていた謎の臭い。それが二階に上がる階段の踊り場辺りで少しだけではあったが強く感じた。それは何かを燃やした焦げた臭いにも似た臭いだった。
鼻を腕で塞ぎながら一歩一歩、階段を上って行き。臭いがする方向を辿って、四階のとある部屋の前に流風は立ち止まる。
なぜかその部屋だけは他の部屋と違ってしっかりと扉が取り付けれており、最近取り付けられたのか真新しい扉だった。
「……ここから臭う」
流風はドアノブに手を伸ばしてゆっくりと扉を開けて隙間からあの謎の臭いが漂ってくる中、部屋の様子を窺った。
外界からの光などが入り込まないように密閉された空間の部屋。
その部屋を囲うように置かれた燭台に灯る蝋燭の火の明かりだけが照らす薄暗く煙が立ち込める部屋の中、黒装束姿の人物が部屋の中央で円陣を組んで何かを囲うように向かい合って三人座っていた。
ふぅ～、と少し息を吐いて流風は安堵の表情を浮かべる。臭いの原因があの燭台が焦げた臭いだと分かったからだ。
しかし、あの三人はこんな所で一体何をしているのか動向を探るために流風はそのまま様子を覗う事にした。
「さぁ～我らの大司教が今宵、政府の懐刀である時統べる魔女の討伐を決行する！　しかし、時統べる魔女には優秀な眷属どもが五名いるとの情報がある」

流風に大きな背を向けて座っている大柄の人物が両手を広げながらそう熱弁する。
「そこで、その眷属どもの足止め及び討伐に我ら使徒が受け持つ事になった」
続いて、流風に背を向けて座っている大柄の人物の左側に座っている少し細身の人物が声高だかにそう発言する。
「他の同志たちはもう動き出している。我らのターゲットはコイツだ」
最初に発言した人物の右側に座る小柄の人物が中央にある何かを指さした。
どうやらこの三人はターゲットの時統べる魔女と呼ばれる人物の直属の部下である眷属たちの内の一人が写った写真を囲って作戦会議をしていたようだった。
黒装束の三人の会話をこっそり聞いていた流風は額を押えて呆れ果てた表情を浮かべながら嘆息を吐く。
なんて馬鹿な連中なのだと嘆くような深い嘆息を吐いた流風は頭を掻き、少し気乗りしないながらも黒装束の馬鹿な作戦を阻止するために動き出した。
「なぁ～に、物騒なお話をしてらっしゃるのお兄さん方。僕もその作戦に参加してもいいですかぁ～」
開けた扉にノックをしながら軽い口調でそう述べた流風が現れて、黒装束の三人は深く被ったフードで表情を窺えないものの少し口を開いて呆気にとれているように見えた。
「なになに。だんまり決めちゃって。僕の登場にびっくりしちゃった？」
少し相手を煽るような発言した流風に対して、背を向けて手前に座っていた大柄の人物が突然腹を抱えて大声で笑い出す。
密閉されていた空間の中、響き渡る低い笑い声。他の二人もその人物に釣られるように笑い始める。
そんな彼らを流風は首を傾げながら見届ける。なぜ、突然笑い出

したのか理由を探りながら……。そして、黒装束の三人はしばらく笑った後に最初に笑い始めた大柄の人物が口を開く。
「まさか、そちらからやってくるとは思わなかったよ。牧瀬流風くん」
大柄の人物の発言に流風の眉がピクッと動いた。
そして、彼らがなぜ自分の名前を知っているのかを瞬時に理解した流風は口角を上げて、にやりと笑みを浮かべる。
「ああ、そういう事ね……。僕もずいぶんと有名になったもんだねぇ～。それも命を狙われるほどに、ね」
彼らが笑った理由が分かった流風は腕を組んで頷く。
彼らのターゲットが自分だったって事に……。
「はぁ～。どうせなら、綺麗なお姉さんか美少女に命を狙われたかったのに……。よりにもよってむさい野郎共って……」
命を狙われているこの状況下で嘆息交じりに軽口を叩いて流風は余裕を見せる。虚勢じゃなくて本当に余裕があるのかお気楽に身なりを整え始めた。
「で、お兄さん方は僕の事を調べ上げているだろうから知っているでしょ？」
何かを諭すように流風は黒装束の三人に言葉を述べる。
その意図が彼らに正確に伝わる事無く、逆にその言葉を待ってましたと言わんばかりに黒装束の三人はにやりと不気味な笑みを浮かべた。
彼らの反応に流風は眉間にしわを寄せて怪訝そうな表情を浮かべる。
「それがどうしたと言うのだ、牧瀬流風。我ら使徒が策を講じずに貴様らのような化け物に挑む訳がなかろう」
「化け物って、ひっどいなぁ～。僕チン傷ついちゃう。でも、まぁ～そういう言葉が出てくるって事はしっかりと調べ尽くしているって訳ね。あぁ～怖。ホント、情報社会って怖いわ～」
現代社会を根本的に否定するかのような発言をして流風は自身の

身体を抱き締めて身震いする。しかし、その態度とは裏腹に流風は少し違和感を感じていた。
なぜ、自分たちの情報が漏れているのだろうか、と。
「ご託はいい。粛清の時間だ」
大柄の人物がそう告げると腕を高く掲げて指をならした。すると、部屋に置かれた燭台でメラメラと燃える蝋燭の火が勢いを増して燃え上がり、黒装束の三人は身構えて臨戦態勢に入った。
そんな彼らに流風はふぅ～と一息を吐いて気持ちを切り替える。
「お兄さん方。恨みっこなしですよ」
少し声のトーンを落として、きりっと引き締まった表情に切り替わった流風は会話を交わした大柄の男の懐へ低空飛行をする鳥のように低い姿勢で走り込んで行く。右腕をムチのようにしならせて男の右頬にめがけて拳を打ちこむ。
しかし、流風の拳は男が少し上体を反らして容易くかわされてしまった。だが、流風は男のその行動に口元を緩める。流風の狙いは男に拳を打ちこむ事ではなく別にあった。
走り込んで行った勢いが残った流れのまま流風の身体が少しよろけながら反転した所を狙って左側にいた細身の人物が流風に掴み掛ろうとしたその時、細身の人物の鼻頭と両頬に顔を横断するような切り傷が出来ていた。
流風を掴み掛ろうとした細身の人物はその痛みに両手で顔を押え、膝から崩れ落ちて悲鳴を上げる。細身の人物の顔に傷を付けた張本人は一回転した形になった後にバックステップをしながら残りの二人にスナップを利かせて右手から何かを投げて間合いを取った。
「あ～あ。浅かったのね。それに少し逸れた、か。ツインズちゃんたちのマネをしてみたけど、コンボって案外ムズイのね……」
少し悔しそうにそう呟いた流風の左手には刃渡り五センチほどの鋭利な刃物がいつのまにか携えていた。
流風が最初に行った攻撃はただのフェイクで初めから細身の男を狙うものだった。

拳をかわされて、その走り込んだ勢いのまま反転した際にブラウスの左袖に少し勢いをつけて腕を振るだけで飛び出るように予め仕込んでいたナイフを瞬時に左手に持ち。反転した流れのまま掴み掛って来た男をめがけて切りつけていた。

しかし、流風が狙った部分より少し下に逸れてしまっていた為、作戦成功とはいかなかった。それに最後に投げた隠しナイフも結局当たらず仕舞いで終わってしまう。

「ねぇ～お兄さん方。何で、こんないたいけな青少年の事を狙うの？　別に悪い事なんてこれっぽっちもやってないのになぁ～。あっ、もしかしてお兄さん方はそちらの方々？」

「ふざけるのも大概にしろ。我らはただの革命者。この腐った世界を変える。ただそれだけの話だ」

「それが分からないってばよ。何がどう腐っていて、何で僕たちが命を狙われなきゃならいのかって話なんですけどねぇ～。分っかんないかなぁ～」

「貴様は何も知らなくても良い。我らに大人しく狩られておけば良い」

「はぁ～全く……。理由ぐらい聞かせてくれてもいいのにさぁ～。まぁ～理由を聞いたからって大人しく狩られる訳にはいかにゃいけどね」

流風は左手に持ったナイフを右手に持ち替えてそのまま男たちに走り込んで行こうとしたその時！

小柄の人物と大柄の人物が流風に顔を切られ顔を押えながら膝を着いていた細身の人物に念じるように手を翳し始める。

その行動を見て、流風は一旦動作を止めて少し距離を取った。

一体、何をしているのだろうかと少し様子を覗う。すると、手を翳されていた細身の人物が血で赤く染まった手で顔を押えながら立ち上がって唐突に笑い始めた。

とち狂ったように笑う細身の人物に流風は少し顔を引きつった。

何がおかしいのか？　顔を切られたにも関わらずどこに笑う要素

がある？
立ち上がった細身の人物は赤く染まった手で懐から液体が入ったガラス瓶を取り出して、その瓶に顔の切り傷から滴り落ちる血液を垂れ流し始める。
「神よ。我に力を！」
垂れ流した血液で赤く染まったガラス瓶の液体をそのまま口に流し込んだ。
他の二人も念じるように自らの手首を刃物で切り付けて、液体が入ったガラス瓶に己の血液を垂れ流し、そして液体を一気に飲み干す。
自らの血液で赤く染めた謎の液体を飲んだ黒装束の三人は一斉に苦しそうに首を掻きむしるような動作を取り始めた。
泡を吹き、瞳孔が開き、焦点が合わないほどに眼球が揺れ動く。そして、何かを掴み取ろうと天に腕を伸ばし、空を握りしめた黒装束の三人の口元は歪み、不敵な笑みを浮かべながら空を握りしめた腕で流風に手を翳し始める。
「また、ハンドパワーですかい？」
今度は自分に手を翳し始めた彼らを侮蔑する。
流風の発言に黒装束の三人はニヤリと不気味な笑みを浮かべながら翳していた手を握りしめた。その行動に違和感を感じた流風はその場から離れるようにサイドステップで左に逸れた瞬間！
流風は右側から熱気を感じ、目をやると自分が先ほどまで立っていた場所が炎上していた。メラメラと勢いよく燃えたぎる火柱が何もなかったそこに存在し、そして物の数秒で静かに鎮火する。
その光景を目の当たりにして流風は目を見開き驚く。
一体、何が起こった？　なぜ、いきなり炎が発生した？
「さぞ、驚きだろうな。だが、何も知らぬまま朽ちろ」
驚く流風を嘲笑うかのように黒装束の三人はまた流風に手を翳した。その動作を見て、流風は急いでその場から離れようと今度は右側に逸れようとしたその時！　足元から熱気が立ち込めて一気に火

柱が勢いよく上がる。
流風は間一髪の所で避けて助かったものの、ブラウスの左袖の左側が焼け焦げて肌が露出していた。
さっきより発火スピードが上がった？　いや、そんな事よりも……と、流風はこの謎の発火能力について考えを巡らせた。すると、一つのキーワード。一つのキーアイテムの事が頭に浮かぶ。
「……夢想薬、か」
この発言に少し男たちは動揺したのか後退りする。
「その反応を見るからにビンゴみたいだね。ただ、解せないのはなぜお兄さん方が夢想薬の原液を持っているのかって事なんだけど……」
夢想薬は錠剤タイプと粉末タイプの二種類しかない事は世間一般的に知れ渡っている常識であった。そのため、流風はあの謎の液体は夢想薬の原液だと推測した。
しかし、なぜそのような物を黒装束の三人が所持していたのだろうか？　流風は疑問に感じた。夢想薬の原液なんて夢想薬を開発している政府の機関にしかないだろうに……と、考えにふけって隙を見せる流風に男たちは手を翳し始める。
すると、それに気が付いた流風は回避するため急いでその場から離れようと試みたが少し反応が遅れたため、流風は転げるような態勢ながらも黒装束の三人の発火攻撃を上手く避ける。
「僕の馬鹿！　今は戦闘中だ。考えるのはあとあと……」
頭を軽く小突いて、衣服に付いたほこりを軽く払う。
絶好の機会も流風に避けられてしまい唇を噛みしめ悔しそうな表情を浮かべる黒装束の三人。そんな彼らに対して流風は少し違和感を感じていた。
先ほどのの発火攻撃の際、さすがの流風もヤバいと危機感を募らせていたけれど結果は態勢を崩しながらも避けていた。なぜ、避けられたのか不思議でしょうがなかった。二度目の発火攻撃の際は自前に相手の動作を見つつの回避行動だったにも関わらず結果は間一

髪だった。
流風はもしかしてと頭に過る。
「ねぇねぇ～お兄さん方。まだ、その能力を完全には制御出来ていないのかにゃ？」
猫のように手を丸めて相手を挑発するように顔の横で手招きの動作を取った。
図星だったのか男たちはバツが悪そうに唇を噛みしめる。だけど、流風はそれでもこの能力は厄介なものだと認識する。
発火スピードがまばらなら避けるタイミングが取りづらいし、まぐれとは言え二度目の発火攻撃のようなタイミングで発動されたら脅威になりかねないと考えた。だけど、マガイ物の能力は所詮マガイ物でしかないと言う事には変わらなかった。
「そういう能力ってさ、位置指定。つまり、座標指定してから発動する類のもの何だけど……。扱いに長けた人なら相手の回避ポイントすら予測して発動しちゃったり、発動するタイミングも思いのままなんだよね。だけどさぁ～お兄さん方の場合、発動するまでのラグが大きいし、手を翳さないと座標指定出来ないし、能力発動も三人がかりでようやくって感じでしょ？　まぁ～それでも厄介な事には変わりないけどねぇ」
「能弁を垂れおって……。我らにご教授とはずいぶんと余裕だな」
「まぁ～職業病と言いましょうか……癖みたいなものですよ。それと余裕なんてこれっぽっちもありませんよぉ～」
顔の前で手を振って否定するものの顔は緩みきって緊張感のない表情を浮かべていた。
そんな流風の態度に彼らの口元は歪み、能力発動のため流風に手を翳し始める。
彼らの行動に流風はやれやれと大きく嘆息をして、右手に持つナイフを小柄の男の手に向けて投げつけた。
ナイフは小柄の人物が翳していた手を貫くように刺さり血がどくどくと滴り落ちる。

だが、小柄の人物は歯を食いしばって痛みに耐え流風に手を翳し続けた。
痛みで手を下ろすとばかり思っていた流風はありゃ？　と、刺された小柄の人物の忍耐強さに驚きつつ急いでその場を離れる。しかし、一向に能力が発動する気配がなかった。それどころか黒装束の三人は天を仰いで翳していた手を掲げ、そしてもがくように何かを掴もうと必死に手を動かし始めた。
それを見た流風は「魔法遣いになるまでの軌跡とその末路」と名付けられたサイトに添付されていた動画および夢想薬開発の記述と思わしき文書の事が頭に過る。男たちの行動が夢想薬を過度に摂取した場合に起きる拒絶反応のような行動に似ていたからだ。
ただ、それでも流風には謎が残っていた。
一体、何を掴み取ろうとしているのかが分からない。夢想薬を過度に摂取する者にしか見えない何かが見えるのだろうか？　だけど、夢想薬の特性を考えればそれはありえない。いくら、合法麻薬とはいえ夢想薬には幻覚症状などと言った副作用は一切ないのだから……。
だったら、一体彼らには何が見えているのだろう？
そして、何を掴み取ろうとしているのだろうか？
流風はあらゆる可能性を考慮して一つの仮説を……。いや、ただの思いつきに過ぎないとある考えに至った。
「もしかして、お兄さん方には見えている……？」
少し自信なさげにそう呟いた流風は一息吐いて、黒装束の三人が見えているものを確かめるため。突然、両耳に付いたクロスのイヤリングに手をやって、そして念じるように瞳を閉じた。
「出ておいで、シルフィー」
唐突に何者かの名前を呼んだ流風の声に応えるかのように流風の背後に突然、長くて白いストールで裸体を隠し、エメラルドグリーンの綺麗な瞳が特徴的な緑髪の少女が現れ、ぷかぷかとあくびをしながら浮いていた。そして、その緑髪少女を呼び出した影響なのか

流風の瞳の色が少女と同じ緑色へと変化していた。
「あっ、もしかして寝てた？」
流風の言葉に少女は少し恥じらうように頬を赤らめながら首を横に振って否定する。
彼女の反応に流風はくすりと笑った。少女が眠っていないと首を振って否定しつつも口元に涎の跡が残っていたからだ。
さてと、と流風は男たちが伸ばす腕の先に目をやった。すると、赤く発光した球体が男たちに捕まらんとトリッキーに動き回っていた。その光景を見た流風はなるほどと首を縦に振って頷く。
流風は男たちが何を掴み取ろうとしていたのかが分かり頷き納得していると大柄の人物が何かに気付いて流風の方へ荒々しい息遣いと共に一歩ずつ歩み寄ってきた。
「それっ……。それをっ……。我らに……よこしぇぇぇ！」
奇声のような大声を発して、流風に――流風の後ろをぷかぷかと浮いている少女を捕らえらんと大柄の人物は猪突猛進に突っ込んでくる。
大柄の人物の猛々しい気迫に少女はビクっと怯えて流風の背中に隠れた。流風は少女を怯えさせた大柄の人物を鋭い目つきで睨みつけ、大きく息を吸って息を止めてから右腕を迫りくる男に向けて薙ぎ払うように腕を振う。
すると、密閉された部屋の中に突如、激しい音を立てた突風が発生して部屋の中を照らしていた蝋燭の灯火は消え、風の勢いに押されて大柄の人物は後方に吹き飛んだ。その後方にあった壁に大きな鈍い音を立てて吹き飛ばされた男は全身を強く打ち、他の二人も後方の壁際まで後退する。
その突風の強さを物語っていたのか窓から差し込む光を遮断していた板が外れて辺りを明るく照らし始めた。
「全く……。女の子の扱いには気を付けてほしいものだね。シルフィーが怯えちゃったじゃない」
少女は自分を捕らえようと突進してきた大柄の人物の様子を窺う

ように流風の背後からちょこっと顔を出す。
黒装束の三人は赤い球体を取る事を忘れて、一体何が起こったのかと言った驚いた表情を浮かべる。
「ちょっとちょっとちょっと～。今さら驚かないでよ。僕の事を調べたんでしょ？　あ～そうか。モノホンを見て驚いちゃってる訳ですかい？　そうですよぉ～。僕は意のままに風を操れちゃう魔法遣いでぇ～す」
と、軽い口調でピースをして調子付いた。
彼の軽口に我に返った黒装束の三人は急いで赤い球体を掴み取ろうとあがくが流風はそうはさせまいともう一度息を吸ってから息を止め、今度は左手を拳銃の形にして銃口と化した人差し指を彼らに向けて三発の銃弾を放つ動作を取る。
打ち放った風弾はサイレント弾のように音を立てずに彼らの腹部へ着弾した。圧縮した空気の弾丸は打撃にも似た強い衝撃で黒装束の三人はその痛みに悶絶し、腹部を押える。
彼らの腹部を射ぬいた流風は拳銃の形を作った左手の銃口にガンマンのようにふぅ～と息を吹く。
「シルフィー。カウントは？」
流風の言葉に少女は指折り数えながら何かをカウントし始めた。そして、数え終えたのか折った指を流風に提示する。
「ありゃ？　残り九発か……。結構時間経ったと思ったんだけどねぇ～、あんまり回復してないのね……」
がっくしと嘆くように肩を落とした。
その間に黒装束の三人は腹部を押えながらも必死に赤い球体を追い続ける。
何かに取り憑かれたように赤い球体を懸命に追い求める。
決死に伸ばす腕も赤い球体にひらりと容易くかわされ。そして、崩れ落ちるように膝をつき這いつくばりながらも赤い球体を掴み取ろうと彼らは腕を伸ばし続ける。
黒装束の三人に無情の知らせを告げるように彼らの身体から蒸気

のようなものが少しずつであったが発生し始め、それを見た流風は口を徐に開いて、

「……浄化の炎」

と、力無く口走った。

黒装束の三人から発生した蒸気は徐々に勢いを増して「魔法遣いになるまでの軌跡とその末路」に記載されていた記録通りに数分後に彼らの身体は発火し始めた。それでも彼らは身体を浄化の炎に燃やされながらも宙に舞う赤い球体から視線をそらすことなく、腕を懸命に伸ばし続ける。

皮膚は焼きただれ血肉が浮き彫りになりつつある黒装束の三人を流風は視線をそらす事無く最後まで見届けた。

しばらくして、浄化の炎は黒装束の三人を燃え尽くして満足したように徐々に炎の勢いを弱めて鎮火していき、皮膚が全て剥がれ落ちた状態となった彼らは未だに宙に舞う赤い球体を見つめたまま、

『夢見る愚者たちに祝福を……』

と、唱えてそのまま彼らは静かに息絶えた……。

モノローグ～牧瀬流風　十八時十四分～

はいは～い！
流風タイムの時間だよ。拍手ぅ～パチパチパチパチ～。
はぁ～。全く、彗月くんがまさか動いているとは思わなかったねぇ。今回の事件が起こった現場を考えれば彼を動かしてはマズイと思わなかったのかね、所長殿は……。
おかげさまで彗月くんは吐いちゃったみたいだし、鳴にゃんに二八二八さてもらったし……って、僕の馬鹿！
ゴホン――まぁ～美玲ちゃんの思惑はさておき、今回の事件は何と言うか複雑な気分になっちゃうよねぇ……。
夢想薬の開発に関わってたであろう「魔法遣いになるまでの軌跡とその末路」を立ち上げた人物と「夢見る愚者」と名乗る集団にそれを束ねる大司教と呼ばれる人物……。
これらは全て何か関係性があるのだろうか？
これぱっかりは大司教と呼ばれる人物に問わないと分からない。なぜなら、大司教と呼ばれる人物が自身が束ねる集団の幹部クラスであろう使徒たちに政府お抱えの研究所にしかない夢想薬の原液を渡したのだろうから……。
だけど、これは何の確証も得ない僕の推測にすぎない。たまたま彼らが独自のルートで夢想薬の原液を入手したのかも知れないし……。
ホント、ただの噂究明だった仕事がとんだ大事件へと発展したもんだ。
それに僕たちの情報を彼らがどうやって掴んだのかも気になる。ふむ、分からない事ばかりだ。
でも、一番分からないのは夢想薬を過度に摂取する事によって起こるあの副作用の事は使徒のお兄さん方は知っていただろうにそこまでしてやり遂げたかった目的とは一体何だったんだろう？

お兄さん方の会話から討伐やら物騒なワードが出ていたし。それに時統べる魔女とその部下である眷属の五人ねぇ～。色々と勘違いしてらっしゃるみたいですなぁ～。

まぁ～いいや、こちらとしては好都合だしね。

さてと、報告がてら後輩のパシリでも遂行しようかね。後輩を使いに走らせた張本人は首を長～くして待ちわびているだろうから……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2549z/

魔法遣いのオキテ

2011年12月9日00時51分発行